

特集「生きがいについて」

雲井昭善

〈序〉

人間が生きていく上において、自己の生を深くみつめるとき、自己にとっての生きがいとは何か、という問いが重要な位置づけをもってせまってくる。とくに、複合的な社会構造をもつ現代社会に生きている限り、生きがいの探究は、自己自身の実存を問うことでありながらも、同時に社会との関わりの中で確かめられねばならない。人間が社会との共存において生きているという事実は、自己の内への反省と外への反省とを強く要請する。自己の内への反省は、自己の自覚から有限性の自覚があり、有限性の自覚は無限者、絶対者とのふれあいを誰しもが志向する。かくて、その絶対者、無限者が何であれ、それらによって生かされる人間の内への自覚が生まれる。仏教的に表現するならば、人生きて生かされるVということになるか。この立場を別の角度から言えば、社会の一員として存在する人間にとって、何らかの形で社会への

還元という積極性が問われる。そこに、個としての自覚という哲学的、宗教的自覚から、社会構造と密着した人間の生きがいが問われてくる。

今回のシンポジウムのテーマ〈生きがいについて〉は、前回の〈人間とは何か〉をうけて、その人間を更に深く、かつ、より具体的に問いかける意義をもつ。しかも、すべての人に共通する今日的テーマであることから、誰しもが対決しなければならぬものの一つである。かくて生きがいの問題は、宗教の原点に回帰すると言えよう。しかも、現代においてこの問題が提起された所以は何か、と言えば、現代社会に対応するわれわれの現実存を根底からゆさぶるに足る重要な課題であるからである。

しかしながら、比較思想学会においてこのテーマが論議されることは、如何なる意味あいをもつのであろうか。既に、前回のシ

シンポジウムにおいて確かめられたことではあるが、シンポジウムは、単なる個々の発表の集積であってはならない。その集積を超えて、一つのテーマに集約し、すべての聴衆者が共に参加しうる「場」が生み出されねばならない。言わば、提案者と参加者との間に「共通の場」が設定されてこそ、充実したシンポジウムとなるだろう。そして、このテーマを媒介として、新たに自己としての生きがいを模索し、確かめる「場」が設定されたとき、シンポジウムの内実化とその意義が充足されるであろう。今回のシンポジウムが、果たしてよくその実を挙げえたかは、諸賢の批判に俟たねばならない。この形式のシンポジウムが、今後、回を重ねることによって、より充実したものになるよう念願してやまない。

(くもい・しょうぜん、インド学、大谷大学教授)